

初恋

2006(平成18)年6月17日鑑賞〈テアトル梅田〉

★★★★



監督＝塙幸成／原作＝中原みすず／出演＝宮崎あおい／小出恵介／宮崎将／小嶺麗奈／柄本佑／青木崇高／松浦祐也／藤村俊二（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2006年日本映画／114分）

…… 3億円の強奪犯人は女子高生だった！ そんな奇想天外な発想で世間をアツと言わせた原作者、中原みすず氏は、1968年12月10日当時、新宿で何をしていたのか……？ そして、『初恋』というタイトルがつけられたのは、なぜ……？ 孤独でピュアな雰囲気豊かな表情で「熱演」するのは、10代最後の作品となった宮崎あおい。その存在感をタップリとかみしめながら、「あの時代」を考え、「あの時代」の若者の生き方を感じたいものだ……。



1968年12月10日……

この映画のパンフレットには、1968年12月10日付朝日新聞夕刊第1面のコピーがはさまれている。その見出しは「警官装い、車ごと」「不審な車、検問突破」「白バイ隊員と思った」。そして、現金輸送車に乗っていた人たちがそこで語っているのは、この映画で実演されたことと全く同じ。ただ交通警察そっくりの「男」と書いてある点を除いては……。

この1968年12月10日当時、私は大学2回生。前年の1967年4月に阪大法学部に入学してから1年半余りの年月を経て、当時私の生活のすべては学生運動一色だったが、それでもその中に恋愛模様もチラリホラリ……？ ちなみに、1968年は東大安田講堂が注目を集めた年。機動隊導入は翌1969年1月だが、1968年3月以降その緊迫した動きには大きな社会的注目が集まっていた。この映画では東京新宿のジャズ喫茶Bがみすず（宮崎あおい）や岸（小出恵介）たちのグループみんなの「たまり場」だが、「私たち」の場合は私の6畳1間のアパートがそれ。こ

ここに数名集まったの夜遅くまでの議論や、そのままの雑魚寝は日常茶飯事。個人として定期的に決まっている予定は週2回の家庭教師のバイトと週1回の銭湯通いぐらいのもので、後は日々「出たとこ勝負」という毎日のくり返しだったが、それはそれで結構充実していたもの……。

私の切り替え VS みすずの切り替え……？

私の場合は、学生運動暮らしが続いたのは翌1969年いっぱいまで。大学3回生の正月が明けた1970年1月26日の21歳の誕生日を期して、司法試験の勉強に大きく舵を切り替えることになった。他方、みすずの受験勉強開始は私より1年早い。すなわち、3億円の強奪に成功した後、彼女はただひたすら大学の受験勉強に精を出し、翌1969年4月には無事大学に合格した。しかし、それと同時に岸と再会することができなくなったみすずの心の中の空白は次第に広がり、「刑事時効の進行」とは別に、みすずの「心の時効」が進行していくことに……。

みんな、実在の人物……？

この映画の原作は中原みすずの『初恋』だが、それに関してパンフレットに書かれてある高山文彦氏（作家）の「血はあたたかい」という解説はすごく興味深い。そこには、「1960年代後半、中上健次と新宿のジャズ喫茶で交流があったのだ」「映画に登場する小説家志望の『タケシ』とは、中上健次のことだろう」と書かれている。この中上健次とは、1976年に第74回芥川賞を受賞した戦後生まれ初の作家のこと。すると、この映画の主人公、みすずとは中原みすずその人……？

ちなみに、「日活ロマンポルノの女王」宮下順子が主演した傑作『赫い髪の女』（79年）は、この中上健次の原作を神代辰巳監督が映画化したもの……。

もちろん、中原みすずが3億円強奪の実行犯であるはずはないから、その原作はすべてがつくり話であることは明らかだが、中原みすずの若かりし頃、1968年頃は、きっとこの映画に登場するみすずのように、孤独ながらピュアな少女だったのだろう。そうすると、グループのボスの存在であったみすずの兄の亮（宮崎将）やその他のユカ（小嶺麗奈）、タケシ（柄本佑）、テツ（青木崇高）、ヤス（松浦祐也）らの登場人物もすべて実在……？ 映画を観終われば、彼ら彼女らのそ

の後の人生が1人ずつ表示されるから、それで確認してみれば面白いかも……？

1人の変わりモノが立てた計画は……？

ジャズ喫茶Bにたむろしているグループはみんな変わりモノだが、とりわけ異質で、1人静かにランボーの詩集を読んでいる東大生が岸。1人だけみんなの輪の中に入ってこないのだが、そうかといってグループへの帰属意識が薄いわけではなく、亮とはお互い認め合っている仲のよう……？ みすずが、「何か相談があればここに来い」と亮からもらっていたマッチを頼りにセーラー服のままこの店を訪れたのは、当然心の空白があり、どうしてもそれが満たされなかったから。しかし、ここに来ればそれが満たされるという保証などあるはずがないのも当然。不審そうにみんながみすずを見る中、岸だけは「子供が何の用だ？」と質問し、それに対して、「大人になってなりたくない」と答えたみすずが店を後にしようとする、そこで岸は「よし、合格だ」と切り返した。ここらへんのやりとりは、いかにも1960年代後半の雰囲気(?)がバッチリ……。その後、なぜみすずがこの店に入り浸ることになったのか？ また、みすずはなぜ岸に惹かれていったのか？ そして、岸がみすずを3億円強奪計画の不可欠な共犯者としたのはなぜか？ 単に、運転免許証を持たないのに車やバイクの運転ができる女だったから、というだけの理由なのかそれとも……？ こんな変わりモノの岸と無口な少女みすずとの心の通い合いの真剣勝負が、この映画最大の見どころだよ……。

実行犯の指紋は？ 毛髪は？

「実行犯は女子高生だった」という発想はいかにもユニークで面白いが、弁護士目でスクリーン上に展開される犯行を観ていると、やはり「かなり無理があるのでは？」と思ってしまう……。女の声だと悟られないように十分注意していることはわかるが、みすずは手袋をしていないから、奪ったセドリックのハンドルやドアにはモロにみすずの指紋がついているのでは……？ また、長い髪の毛を束ねてヘルメットをつけているものの、1本でも髪の毛が車内に落ちていればそれを鑑定すれば……？ また、若い男が運転するライトバンが検問を突破したことは明らかなのだから、大量の遺留品が残されていたこの犯行で、バイク屋

(藤村俊二) や岸までたどり着くことはそんなに難しいことではないのでは、と思えてしまう。そしてその線が出れば、ジャズ喫茶Bに出入りしていたグループやみすずにも捜査の手が……？

もっとも、そのように考えていったのでは、『初恋』というタイトルの物語は生まれないだろうし、あの1968年という時代に、岸が一体何を目標してこの犯行を計画し、みすずを不可欠な共犯者として指名し、大胆不敵なこの犯行を決行したのかという「意義」も見えなくなってしまうことになるだろう。だって、この強奪された3億円は未だに使われていないことは明らかなのだから……。

宮崎あおいの演技は絶品！

この映画は宮崎あおいの10代最後の作品となったとのことだが、この原作と映画はまさに彼女のために用意されたようなもの。宮崎あおいは『NANA -ナナ-』(05年)で目にとまった女優で、私は「今後の活躍が期待されるかわいい若手女優として、私の頭の中にもインプットしておこう」と書いている(『シネマルーム8』192頁参照)。その彼女のさらに成長した演技を観たのが『好きだ、』(05年)。極端にセリフの少ないこの映画での、表情や強い目の力による演技はすばらしいものだった。したがって、私はそこでは「1985年生まれの彼女が今や日本を代表する若手女優に成長していることが、この映画を観るとありありとわかる」と書いた。そしてこの『初恋』における、孤独感・虚無感・憂鬱感いっぱい少女みすずになりきった、宮崎あおいの演技は絶品。この映画でも、岸と2人で「語り合う」場面を含めて、みすずのセリフは極端に少ないが、みすずがなぜ岸の「求め」に応じて共犯者になったのか、そしてまた、岸を失った後の孤独感や喪失感を実に見事に表現している。

『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年)や『着信アリ Final』(06年)の堀北真希とともに、今や日本の若手女優のトップにのし上がっていることを痛感。しかし私が心配するのは、今の映画界や芸能界の、何でも旬のうちにトコトン露出させ、人気落ちるとすぐに使い捨ててしまうという風潮……。願わくば、今後も彼女がいい作品を選んで、大人の正統派・演技派女優として成長してもらいたいものだ。

2006(平成18)年6月20日記